

〔研究ノート〕 八丈島巫者一族と「病気」

土屋 久（倫理研究所客員研究員）

はじめに

本稿は、八丈島の巫者一族（以下 A と表記）を事例として、そこにみられる「病気」観の概要を報告し若干の考察を加えるものである。

江戸時代に八丈島に流された近藤富蔵（一八〇五～一八八七）は、『八丈實記』の中でミコの存在を次のように批判的に記している。

巫女ト云フモノ嶋中ニ横行シテ愚民ヲ惑スコト少カラス。⁽¹⁾

富蔵のミコ批判が的を得たものであるかどうかの判断は置くとしても、彼の記述からは、当時の島の生活に占めるミコの存在の大きさが窺われよう。

八丈島でのミコの業は、失せものを探したり、口寄せをおこなったり、ヨゲン（予言）をしたりと、さまざまであったが、その中で「病気」治しも大きな比重を占めていた。この八丈島の伝統的な巫俗は、現在、急速に衰退している。しかし、それでも尚、ミコ達が伝えてきた「病気」観は、今でも八丈島の「病気行動」や「保健行動」に影響を与えていると考えられるし、また、島のヘルスケア・システムを考えていくうえでも無視できない部分があると思われる。

筆者は、現在、島の「病気行動」「保健行動」乃至は、ヘルスケア・システムを理解するための基礎的な調査をおこなっているのだが、本稿では、その調査の中間報告及び中間的なまとめをおこない、今後の課題を明らかにしておきたい。

尚、「病気」を括弧書きにしたのは、医療人類学等でおこなわれる、「病気」を「病い」と「疾病」に分類する考え方に則ったことであり、この考えを採ることにより、「病気」を医学／近代医療が扱う「疾病」に限定されず、主観的な体験としての不調も含めた幅広い概念として扱うことができるからである。⁽²⁾